

学校に関するドイツ、マレーシア、日本の意識比較研究

－ 連想調査によるオスナブリュック、ペナン、長崎の調査 －

上 蘭 恒太郎

Comparative Research of Consciousness about School in Germany, Malaysia and Japan

－ Survey in Osnabrück, Penang and Nagasaki by Association Test －

Kohtaro KAMIZONO

学校に関する連想は、オスナブリュック、ペナン、長崎の3カ所の大学生、ペナンおよび長崎の小学生において、共通に先生との結びつきが最も強く、勉強（学習）、生徒（友だち）の3つを基本として成立しており、学校意識構造の普遍性を示した。

長崎の経年調査から、1996年にいじめ関連の反応語（刺激語〈学校〉から「いじめ」が人数比18.3%）が2002年には減少（4.0%）し、学校が落ち着いてきたと言えるが、学校が「いじめ」を思い起こさせる点は依然として特徴となっている。

教育概念は、長崎の大学生の連想調査によれば、家庭、地域を含んで構成されるものの、何より学校と結びついている。子ども概念は、小さく、かわいく、元気に、遊ぶ、無邪気なイメージに彩られており、近代子ども観の影響が見られる。

I はじめに

I-1 学校像の異同を探る意味

学校って何だろう、この問いは、1980年半ば以降また再び1990年半ば以降、学校への疑問の声とともに増大した。すなわち、1. 日本でいわゆるバブルが崩壊して¹⁾企業が経営戦略の転換を図る間にも、学校は高度成長の夢を支える意識体制のままで変わらず、転換を図る社会から離反したために、2. 日本の人材供給を支えた学校神話、学校でいい成績をあげて学校階梯を昇るほどいい仕事に就けるという物語がほころび、3. 近代を支えた神話、進歩を支える科学に疑問符がつき、急速な発展に疑念が生じたとき、すなわち近代学校を支えた権威が崩れて科学と文化の場としての学校が輝きを失ったとき、4. 第二次世界大戦後およそ50年間、いくらかの修正だけで存続し続けた学校の制度疲労が目につくようになり、5. 教員の意識が組織内の役割に限定されて教育全体を見る眼が薄れ、学校が今日の課題にしなやかに対応する力を失い、6. 学校でいじめが広がり、子どもたちが自殺してのち、7. いじめと子どもの自殺を引き起こす事態を10年を経て繰り返す学校ならば、学校に行くよりも子どもが生きていた方がいいという妥当な判断が生まれたとき、学

校って何だろう²⁾という疑念が、学校の存在意義をゆるがしている。

いじめ概念について筆者は先に、「日本語のいじめは強く日本的様相に刻印されており、1980 年以降、いじめによって心理的に追い込まれた子どもたちの自殺によって、人々の間に新しいいじめ概念が形成されたと思われる」³⁾旨、連想調査によって論じた。日本人にとっていじめの語感はおそらく 1980 年代半ばから変化しており、いじめは学校と自殺を定義に含む概念に変わった⁴⁾。

いじめの定義が学校を含むように変化したとき、人々の意識における学校の定義は変わったのだろうか。本論は、学校って何だろうの問いに対して、学校とは人々の意識において何であるのかを示すことによって答えようとする。方法として、連想調査を用い、連想マップによって人々の意識全体を描き、比較をおこなう。比較は、第 1 にヨーロッパおよびアジアと日本の比較であり、ドイツのオスナブリュック、マレーシアのペナン、日本の長崎における大学生対象の連想調査結果を用いる。第 2 に、ペナンおよび長崎の小学生の調査によって学校像を比較する。第 3 に長崎での 1996 年の調査と 2002 年のいずれも大学生についての調査を比べ、学校が変わったと認識されているか否かを見る⁵⁾。

近代学校が近代を支えた組織として普遍的形態ならば、意識における学校も国を問わず共通であると考えられる。しかしまた日本の学習指導要領改訂など学校は 1990 年代半ば以降変わってきたはずである。すると、その変化は変わりゆく過程を体験した大学生の意識に現れるだろう。仮説として要約すれば、以上の 2 点を本論で扱う。

I - 2 教育に関する意識に現れる学校

教育において学校はいかなる位置にあり、子どものなかで学校はどのように捉えられているのか、意識における学校の位置づけを明らかにしておきたい。2002 年の長崎大学教育学部生の連想を取り上げる（図 1）。

〈教育〉と言うと「学校」⁶⁾であると、人数比で 65.5% が想起している（図 1 右上）。教育は、何よりもまず学校と結びついている。さらに「子ども」「家庭」が続き、いずれも連想において定義域にあると見なしていい 36% を超えて、教育の中心を構成している。子どもに対する教育が〈教育〉の中心にあるが、学校だけではなく家庭もまた教育を担っていることが意識されている。教育の場にいるのは、「教師」「先生」であり、「親」であり、おこなわれているのは「教える」ことであり「勉強」であると読みとれる。

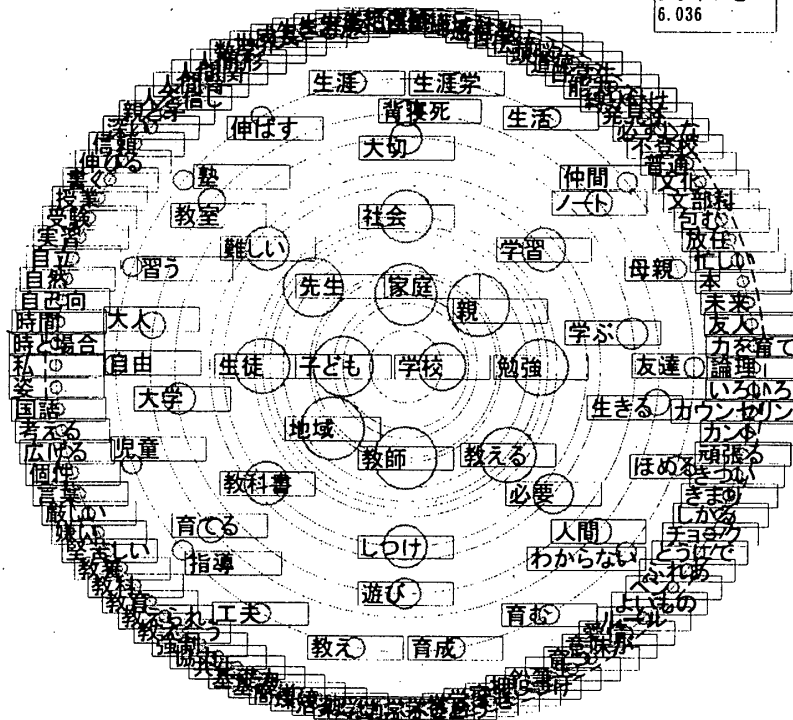
「学校」と「教室」を教育の場と考えて合算してみると人数比で 7 割を超える。〈教育〉とは「教える」「教え」「勉強」「学習」「学ぶ」「学び」「学びあう」「習う」「指導」であると概括すると 8 割を超える。学ぶ主体ないし教える相手は「子ども」「生徒」「児童」で 7 割を超える。教えるのは「教師」「先生」で 58.6%、「家庭」が 43.1%、「母親」を含めて「親」関係で 37.9%、「地域」(32.8%) が「社会」などと合わせると 50.0% に及び、「生涯学習」も 3.4%（生涯教育と合わせると 5.2%）思いおこされている。教育の場として意識される割合は、学校が大きく、次いで家庭と地域であり、おこなわれるのは、子どもを教えることである。

連想マップ(Association Map)
長崎大学2002教育
Stimulate Word: 教育、2002年12月

Module Version 3.01, Programmed by T. Fujiki 1999.11

反応者数: 58 名, 反応語種数: 145 種類, 反応語総数: 415 語

エントロピー
6.036



Response 語数	人数比百分率
学校	38 65.5%
子ども	28 48.3%
家庭	25 43.1%
教師	20 34.5%
親	19 32.8%
地域	19 32.8%
先生	14 24.1%
教える	12 20.7%
勉強	12 20.7%
生徒	11 19.0%
社会	10 17.2%
しつけ	7 12.1%
学習	7 12.1%
教科書	7 12.1%
難しい	7 12.1%
必要	6 10.3%
学ぶ	4 6.9%
大学	4 6.9%
大切	4 6.9%
遊び	4 6.9%
ノート	3 5.2%
育てる	3 5.2%
教室	3 5.2%
人間	3 5.2%
生きる	3 5.2%
大人	3 5.2%
育てる	3 5.2%
力をつける	2 3.4%
ほめる	2 3.4%
わからない	2 3.4%
育む	2 3.4%
育成	2 3.4%
教える	2 3.4%
工夫	2 3.4%
指導	2 3.4%
児童	2 3.4%
自由	2 3.4%
習う	2 3.4%
塾	2 3.4%
伸ばす	2 3.4%
生涯	2 3.4%
生涯学習	2 3.4%
生活	2 3.4%
仲間	2 3.4%
母親	2 3.4%
友達	2 3.4%
(1語の反応後は省略)	
total	415

図1 〈教育〉2002年長崎の大学生の連想マップと反応語

意識上で学校が教育の中心を占めていた。しかし〈学校〉の中心を「教育」が占めるわけではない。反応語としての「教育」は、〈学校〉からは2002年の大学生についての長崎の調査で5.1%、1996年で1.7%（いずれも人数比）にすぎない。〈学校〉からは、教育を意識するよりも、あるいは学校を包摂する抽象度の高い概念「教育」よりも、学校を構成する具体的な要素が浮かびあがる。

〈教育〉の連想から、教育を考えるには学校を軸にすることが意識のあり方に沿うことになる。教育について学校意識が高いばかりでなく、教育問題が主に学校問題として意識されているからである。興味深いのは、〈教育〉からいじめの反応語は登場しないが、〈学校〉からは想起される。〈学校〉から2002年長崎の調査で「いじめ」が4.0%、1996年の調査で18.3%思い起こされている。言い換えれば、いじめ問題は学校問題であると読みとれる。

学校の意識について論じる前に、教育のもう一つの大きな要素である〈子ども〉について見ておく。

II 子どもの様相

子どもからの連想は、大きく3つに分けられる。1つは《近代子ども観》を表現した言葉であり、2つは《学校》関係であり、3つには《親》もとの子どもである。

連想マップ(Association Map)
長崎大学2002子ども
Stimulate Word: 子ども, 2002年12月

Module Version 3.01, Programmed by T. Fujiki 1999.11

反応者数: 58 名, 反応語種数: 149 種類, 反応語総数: 377 語

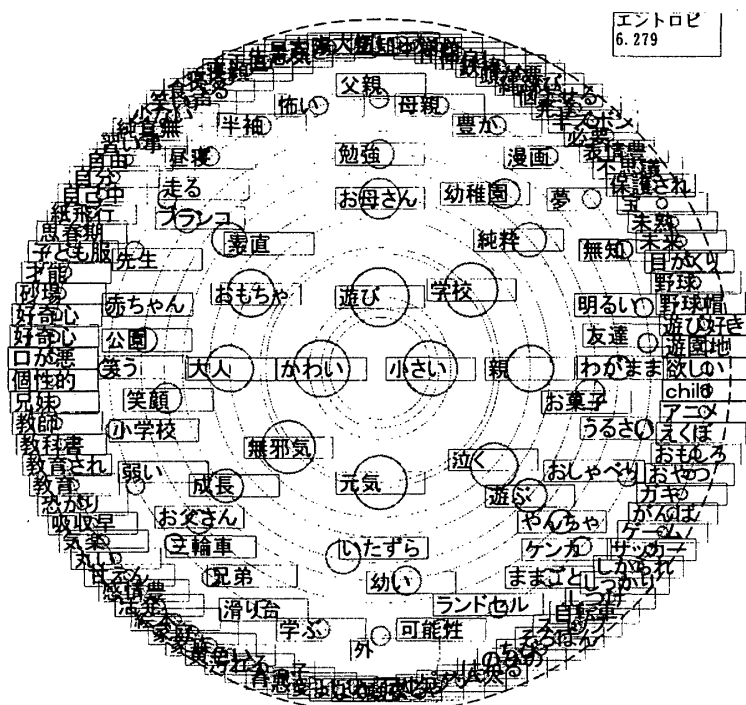


図2 〈子ども〉2002年長崎の大学生の連想マップと反応語

〈子ども〉による連想マップの中心には、いわゆる子どもらしさを表現する言葉が並ぶ(図2)。「小さい」「かわいい」「無邪気」に「遊び」続ける子どもを、「学校」や「親」や「大人」「お母さん」が囲んでいるようにも見える。連想マップの様子は、人々が抱いている子ども概念を示していてもおもしろい。

〈子ども〉からの反応語の1位を占める例えば「小さい」(53.4%)は、事実であると同時に人々が子どもの小ささに目を止めているという意識の向きを表現している。小さく「かわいい」(48.3%)様子は、近代以降着目された子どもについての想念であり、子ども概念の定義になっている。「無邪気」(22.4%)、「純粋」(8.6%)や「素直」(8.6%)「いたずら」(8.6%)という子どもらしさの表現は、典型的な近代子ども観であり、人数比150.0%に及ぶ。

そのほか「遊び」(41.4%)「遊ぶ」(8.6%)「元気」(24.1%)な子は、事実である以上に子どものあるべきイメージの表現であり、子ども論や多くの小学校の標語に現れる。「いたずら」や「やんちゃ」(5.2%)も必ずしも子ども否定の表現ではなく、子どもらしさとして受容する意味あいを含む。そのように理解すると、近代子ども観を含む表現は多い。子どもたちの生活時間からすると「勉強」(6.9%)し「学ぶ」(3.4%)ことが多いにもかかわらず、子どもの姿として思いおこされるのは「遊び」「遊ぶ」「おもちゃ」(15.5%)「お菓子」(6.9%)「ブランコ」(5.2%)「ままごと」「滑り台」「三輪車」(いずれも3.4%)である。子どもは事実以上に、子どもとして見る見方によって想起されている。

ほとんどすべての子どもを10年以上にわたって収容し続ける「学校」(22.4%)が意外に意識に昇らないのは、学校が当たり前すぎるのであろう。学校は、幼稚園に続いて、義務教育の9年間、また9割以上の高校進学率を考えると、ほとんどすべての子どもを、また子ども期間のほとんどすべてを、1系統の組織でまかなっている、そう考えると2割を超える程度という反応語数は低すぎる。《学校》は「幼稚園」(6.9%)「小学校」(3.4%)と合わせても32.8%である。

家庭にいる「親」は15.5%、「お母さん」(12.1%)や「お父さん」(5.2%)などと合計すると39.7%になる。子ども観、学校、家庭の3つは、子ども概念を構成する基本要素である。

子どもの連想マップと学校の連想マップを比べると、「先生」は、子どもと共に思い出される存在ではなく、いわば〈学校〉に張りついた存在である(〈子ども〉からは人数比3.4%)。

〈学校〉から「先生」はいつも第1に思い出される：2002年長崎の調査で1位(図3)、1996年長崎で1位(図4)、1998年オスナブリュックで1位(図5)、1999年ペナンで1位(図6)、1996年ブルネイで1位。学校は先生を構成要素としているという以上に学校とは先生であると言えるが、子どもは先生を必要としていないのではないかと疑いたくなる。

Ⅲ 〈学校〉の意識比較

2002年の長崎、1996年の長崎、オスナブリュック、ペナンにおける大学生(主に2、3年生)対象の〈学校〉を扱い、1996年のブルネイにおける連想調査を参考にしながら、学校について論じる。また、ペナンの小学生、長崎の小学生(主に4、5年生)の意識における〈学校〉を比較検討する。

Ⅲ-1 学校は先生のいるところ

〈学校〉を刺激語とする7つの調査で、いずれも第1に思いおこされているのは「先生」(Lehrer, teacher)である。2002年の長崎で人数比49.5%、1996年長崎で64.3%、オスナブリュックで71.7%、ペナンで81.9%、ブルネイで50.0%、小学生の場合でも1位で、長崎54.9%(図7)、ペナン39.2%(図8)である。学校とは先生のいるところというイメージは、どこでも変わらない。

2002年長崎で、「先生」「勉強」(47.5%)「友だち」(44.4%)がいずれも36%を超えて学校の定義と見なしていい領域に入っており、1996年長崎では「先生」「生徒」(35.7%)「勉強」(30.4%)、オスナブリュックで「Lehrer先生」「lernen勉強する」(37.7%)「Schuler生徒」(34.0%)、ペナンで「teacher」「student」(41.0%)「book」(38.6%)、ブルネイで「teacher」「studying」(43.8%)「friend」(35.4%)である。いずれも「先生」を筆頭とするほか、生徒(ないし友だち)と勉強(ないし本)を軸に連想マップが成り立っており、先生、生徒、勉強で学校が成り立つ構造はどこでも変わらないらしい。

ただ、「生徒」と「友だち」の意味合いは異なる。生徒は事実だが友だちは学校に行く動機になる。1998年に筆者がおこなった対連想調査⁷⁾、学校の好きなところ・嫌いなところ、学校の良いところ・悪いところ、によれば、友だちゆえに学校が好きで、友だちを学校の良いところと感じており、学校に行く動機として友だちが大きい。友だちは学校の楽しさの要因である。勉強は、対連想調査から、良いことではあろうが嫌いだという子どもたちの感覚が読みとれる。

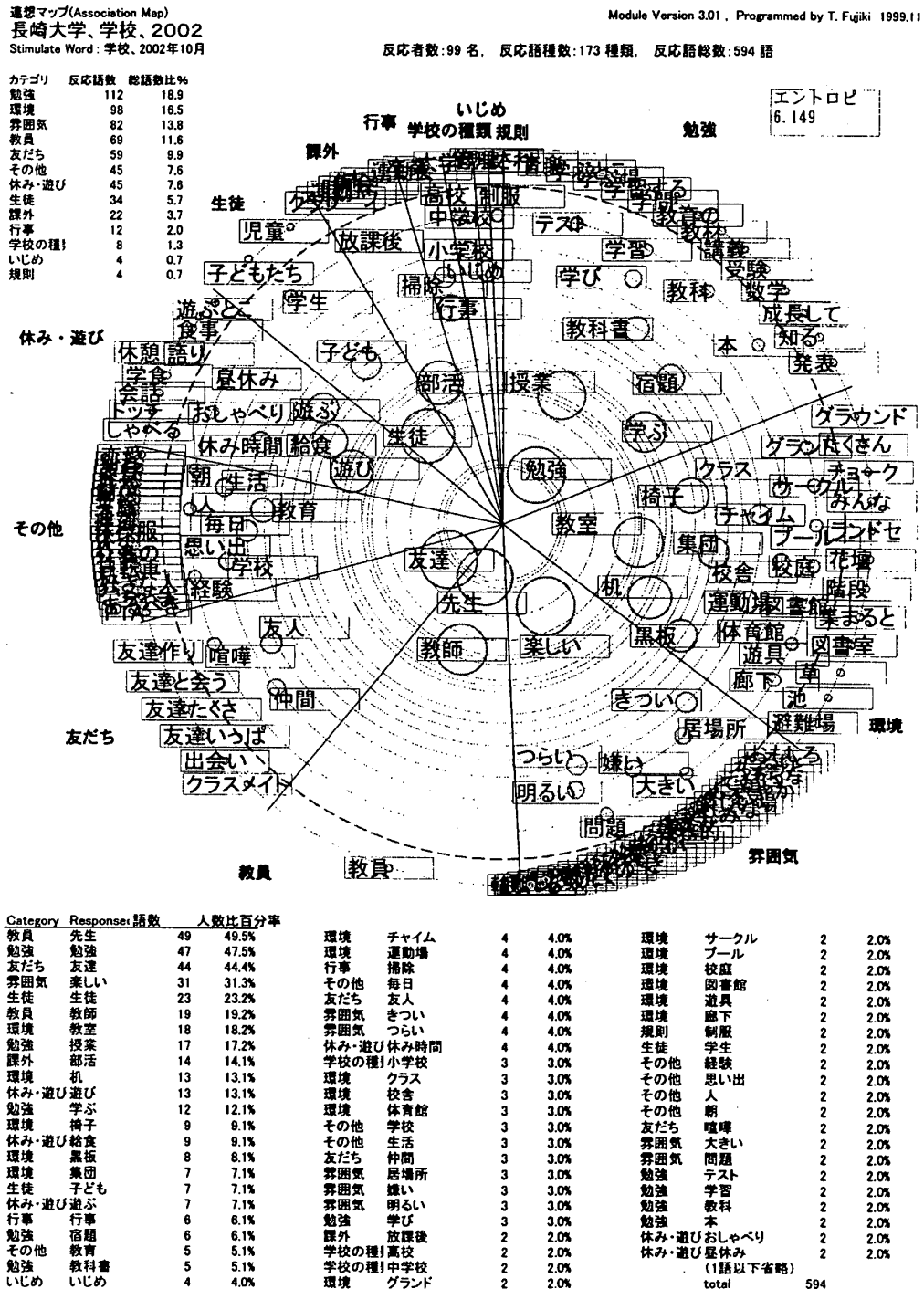


図3 〈学校〉2002年長崎の連想マップと反応語

反応語として「先生」は学校からの連想の筆頭であるが、カテゴリとして集約すると 11.6% (図3左上, カテゴリ《教員》) で, 1996 年長崎 (11.6%, 図4) と変わらず, オズナブリュック (16.6%), ペナン (14.7%) とも有意差はなく, 小学生の場合でも長崎で 13.0%, ペナン

の小学生で11.5%と大きな差はない。教員は学校からまず思いおこされる存在であり、その意識内の比重はどこでも安定している。教員のあり方はおそらく近代学校制度の確立しているところ、ヨーロッパ、アジア、大学生、小学生を問わず安定しており、学校制度すなわち教員が教えるシステムは文化による差を受けにくい近代組織だということであろう。

以下、2002年の長崎の〈学校〉と1996年の長崎、オスナブリュック、ペナンの連想調査を比較しながら述べる。

Ⅲ-2 長崎の〈学校〉の経年変化

1996年の学校にはいじめ問題などが影を落としていたが、2002年になると反応語の印象は明るくなってきた(図3、図4)。

1996年には〈学校〉から「いじめ」が人数比18.3%想起されたが、2002年には4.0%に減少している。1996年には「楽しい」が13.9%だったが、2002年は31.3%に増加している。カテゴリ《雰囲気》のなかでみると、1996年には否定的な反応語が「きつい」「暗い」「嫌い」など人数比23.5%で、肯定的な語が「楽しい」「面白い」など16.5%であったが、2002年になると否定的な語が「きつい」「つらい」「嫌い」など23.2%、肯定的な語が「楽しい」「楽しみ」「好き」など41.4%に増えている。もっとも2002年の肯定的反応語が占める割合には、「楽しい」が増えたことが増加分の7割以上の役割を果たしている。

カテゴリ《友だち》は1996年の連想調査から2002年の間に4.4%から9.9%に増加している($p<.05$)。出現する反応語は基本的に「友だち」(1996年人数比25.2%から2002年44.4%に)「友人」(3.5%から4.0%)「仲間」(2.6%から3.0%)で変わらない。増加したのは「友だち」と「喧嘩」、1人1語の反応語「友だちたくさん」「友だちいっぱい」「友だちと会う」「クラスメイト」などである。

《休み・遊び》も増えた。1996年には「給食」(11.3%から9.1%に)がこのカテゴリ内で最も多かったが2002年には「遊び」「遊ぶ」(両者合計で4.3%から20.2%に)が最多になっている。「おしゃべり」(2002年に2.0%)を含めて、遊びの印象が増え、休み時間のようなすが思いおこされ、友だちに関わる言葉が多く想起される状況が、学校を楽しいものに行っている要因である。

《勉強》も、1996年の12.5%から2002年には18.9%に増加した($p<.05$)。「勉強」(30.4%から47.5%に)「授業」(14.8%から17.2%に)がこのカテゴリの中心である点は変わらない。「学ぶ」(2002年に12.1%)「学び」(2002年に3.0%)など、1980年代後半、1990年代後半といじめによる自殺を繰り返した学校が落ち着きを取り戻していると思われる。

しかし、いじめの記憶が消えたり、いじめを排撃する雰囲気が育ったわけではない。海外での調査、オスナブリュックで「Qual いじめ」(図5)は登場しない、ペナンでも「bully いじめ」(図6)は登場しない。かつて筆者は〈いじめ〉の連想調査から「自殺」など強い印象は薄れたが、1990年代半ばまでに変化したいじめ概念の構造は変わっていない、いじめの連想マップ全体としては「自殺」(2002年で人数比23.2%)と「学校」(2002年で人数比39.4%)を軸に連想がおこなわれていると論じた。1996年の調査から2002年に至る間に、いじめはよくないとする者の割合も増えていない⁸⁾。いじめと結びつけられた学校に関して、刺激語〈学校〉からもいじめは減少しているが、消えてはいない。



ドイツ、オスナブリュック大学生の〈Schule 学校〉に関する連想マップ（図5）、ならびにマレーシア、ペナンの聖マレーシア大学生の〈school 学校〉の連想マップ（図6）を示す。オスナブリュックで《課外》活動は0.6%しか思いおこされておらず（図5）、2002年長崎の3.7%と比較して少ない。この違いは、ドイツの小学校が基本的に午前中の学習で終わり、スポーツなどはむしろ社会体育としておこなわれる背景がある。そこから、ドイツの

連想マップ(Association Map)

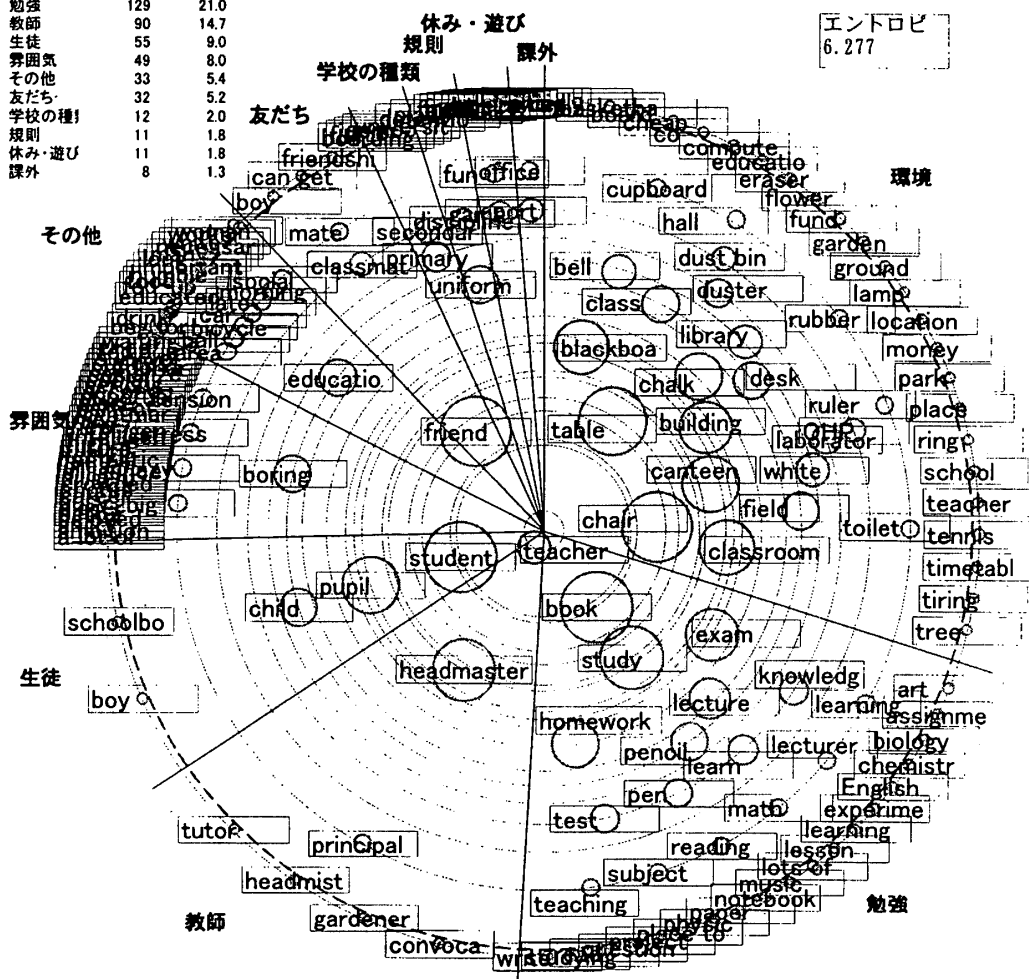
聖マリーシア大学、ペナン、school

Stimulate Word: school, 1999年7月

Module Version 3.01, Programmed by T. Fujiki 1999.

反応者数: 83 名, 反応語種数: 184 種類, 反応語総数: 613 語

カテゴリ	反応語数	総語数比%
環境	183	29.9
勉強	129	21.0
教師	90	14.7
生徒	55	9.0
雰囲気	49	8.0
その他	33	5.4
友だち	32	5.2
学校の種別	12	2.0
規則	11	1.8
休み・遊び	11	1.8
課外	8	1.3



Category	Responder	語数	人数比百分率
教師	teacher	68	81.9%
生徒	student	34	41.0%
勉強	book	32	38.6%
環境	chair	24	28.9%
友だち	friend	24	28.9%
環境	table	21	25.3%
勉強	study	17	20.5%
教師	headmaster	16	19.3%
環境	building	13	15.7%
生徒	pupil	13	15.7%
環境	blackboard	12	14.5%
環境	classroom	12	14.5%
環境	canteen	11	13.3%
勉強	exam	11	13.3%
勉強	chalk	9	10.8%
勉強	homework	9	10.8%
勉強	lecture	7	8.4%
環境	class	6	7.2%
環境	desk	6	7.2%
環境	field	6	7.2%
規則	uniform	6	7.2%
生徒	child	6	7.2%
その他	education	6	7.2%

雰囲気	boring	6	7.2%
勉強	pencil	6	7.2%
環境	bell	5	6.0%
環境	library	5	6.0%
環境	white board	5	6.0%
学校の種別	primary	4	4.8%
環境	duster	4	4.8%
勉強	laboratory	4	4.8%
勉強	knowledge	4	4.8%
勉強	learn	4	4.8%
勉強	pen	4	4.8%
勉強	test	4	4.8%
課外	sport	3	3.6%
学校の種別	secondary	3	3.6%
環境	dust bin	3	3.6%
環境	OHP	3	3.6%
規則	discipline	3	3.6%
友だち	classmate	3	3.6%
休み・遊び	game	3	3.6%
課外	office	2	2.4%
環境	cupboard	2	2.4%
環境	hall	2	2.4%
環境	rubber	2	2.4%

環境	ruler	2	2.4%
環境	toilet	2	2.4%
教師	principal	2	2.4%
その他	area	2	2.4%
その他	ball	2	2.4%
その他	bicycle	2	2.4%
その他	car	2	2.4%
その他	late	2	2.4%
その他	morning	2	2.4%
その他	social life	2	2.4%
友だち	mate	2	2.4%
雰囲気	big	2	2.4%
雰囲気	lazy	2	2.4%
雰囲気	stress	2	2.4%
雰囲気	tension	2	2.4%
勉強	learning	2	2.4%
勉強	lecturer	2	2.4%
勉強	math	2	2.4%
勉強	reading	2	2.4%
勉強	subject	2	2.4%
勉強	teaching	2	2.4%
休み・遊び	fun	2	2.4%
(1語以下省略)			
total		613	

図 6 〈school 学校〉ペナンの連想マップと反応語

子どもたちの場合およそ半数が学校外の友人であり⁹⁾、したがって、学校での友だちの反応語が多くなった2002年の長崎に比べると、《友だち》もドイツが少ない(4.0%, 2002年長崎で9.9%, ただし1996年長崎で4.4%)結果になっているのであろう。《課外》はペナンの聖マレーシア大学生(school 学校)でも1.3%と、2002年長崎と比較して少なく、学校での課外活動を重視する日本との違いを見せる。

《その他》の内容を見ると、長崎の場合、「毎日」「生活」「登校」「朝早い」と学校生活を思いおこしての言葉が見られるが、オスナブリュックの場合同様の言葉「Schulleben 学校生活」のほかに職業へと向かう意識の強さを示す言葉「Beruf 職業」「Referendariat 試補見習い」「Praktikum 教育実習」を見てとることができる。

「校長」の反応語が、1996年長崎で3.5%登場するけれども2002年落ち着いた学校状態になると現れない。これに比べてオスナブリュックで「Direktor 校長」が9.4%出現しているのは、意識に登場している校長の姿として面白い。ペナンの大学生では19.3%「headmaster 校長」が登場し、ブルネイでも「principal 校長」(6.3%)として反応語に登場する。校長は存在がないわけではない、長崎の小学生の間でもペナンの小学生の間でも5%程度登場するのだが、日本での管理職校長の姿は意味として残りにくいのであろうか。

ペナンの聖マレーシア大学生(school 学校)では、《行事》に該当する反応語が登場せず、2002年の長崎(2.0%, 1996年で2.8%)と差がある($p < .05$)。ペナンの小学校でも《行事》は登場しない(長崎の小学生で1.7%)が、学校が2部制、午前中と午後の入れ替え制で、行事があまりおこなわれないためであろう。もちろんペナンですべての小学校が2部制ではない、しかし行事が多くまた大切にしている日本の学校とも違う様子が現れている。

こうした様々な相違はあるが、学校の基本構造は地域や文化圏によって変わらない、どこでも学校は基本的に、教員と生徒または友だち、勉強と本で成立している。

IV ペナンの小学生と長崎の小学生の学校像

ペナンの小学校と長崎の小学校のマップを比べると、「teacher」「先生」が筆頭であることは同じで、学校を構成する基本要素《教員》(反応語数に占める割合はペナンで11.5%, 長崎で13.0%), 《勉強》(ペナン13.5%, 長崎17.8%), 《生徒》(ペナン9.4%, 長崎9.4%)に差は認められない。学校とは先生のいるところで、生徒が勉強するところ、との学校の定義が共通である。

《勉強》を構成する反応語を見るとしかし、マレーシアでは「book」(人数比11.4%)に次いで「learn」(8.9%)「study」(7.6%)が出現するのに対して、長崎では「勉強」が36.6%を占める。長崎では「教科書」が3.3%と低く、教科書または本が勉強において比較的意識されていない。学習における教科書の扱い、また本や鉛筆(ペナンで7.6%)といった個人の勉強道具に対する意識の低さが特徴的である。

日本ではおそらく学校と勉強道具の存在が当たり前で特に意識されないであろう。《雰囲気》カテゴリは長崎が多く($p < .05$)、内容も異なる。ペナンでは学校は「big」(31.6%)で「beautiful」(24.1%, あるいは女性の先生が多いため先生も含むのかもしれない)だが、長崎では「大きい」(5.2%)とはいうものの「古い」(5.2%)。長崎ではむしろ学校が自分にとって「楽しい」(24.2%)ことに意味があるのだろう。

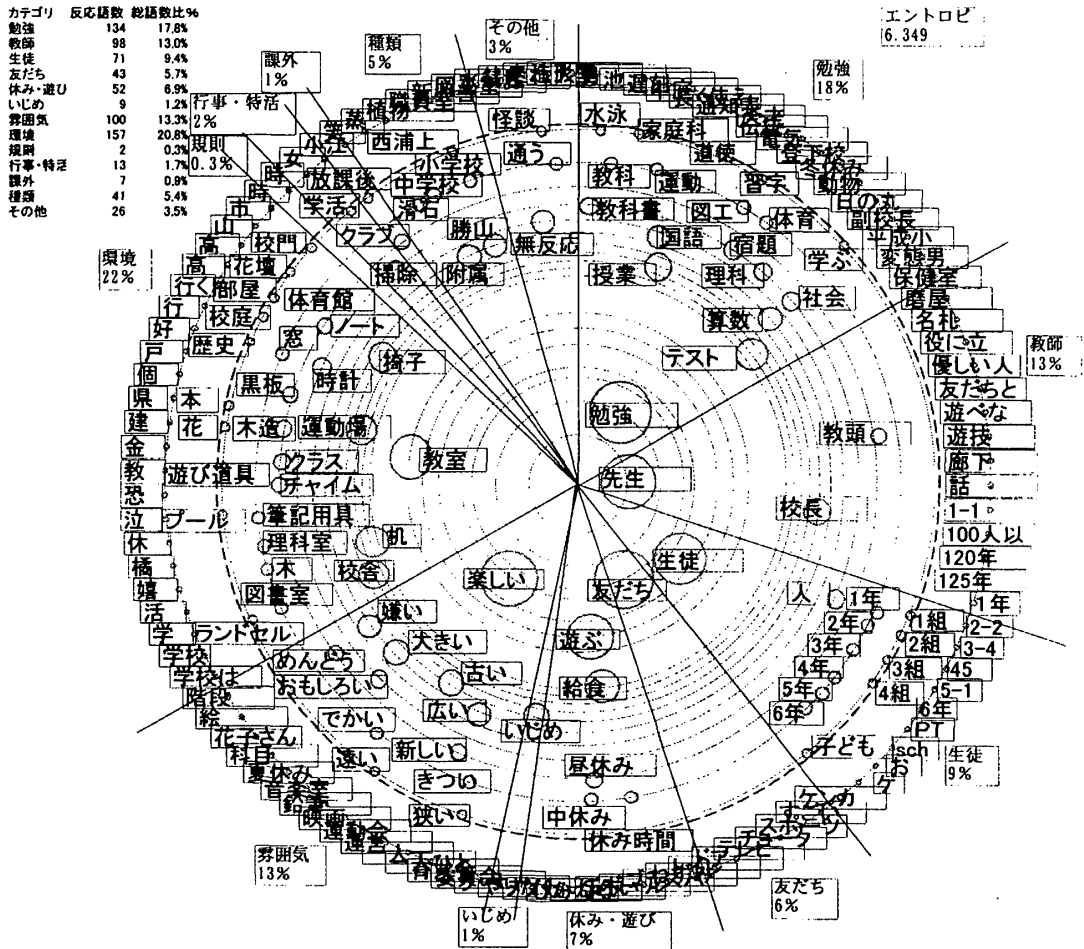
連想マップ(Association Map)

長崎市小学校5年、学校

Stimulate Word : 学校、1996年7月

Module Version 2.93 . Programmed by T. Fujiki 1997.1

反應者數:153 名, 反應語種數:200 種類, 反應語總數:753 語



Category	Response	語数	人数	百分率
教師	先生	84	54	54.9%
勉強	勉強	56	36.6	36.6%
友だち	友だち	42	27.5	27.5%
雰囲気	楽しい	37	24.2	24.2%
生徒	生徒	28	18.3	18.3%
休み・遊び	遊ぶ	23	15.0	15.0%
環境	教室	19	12.4	12.4%
休み・遊び	給食	12	7.8	7.8%
勉強	テスト	11	7.2	7.2%
環境	机	11	7.2	7.2%
環境	運動場	10	6.5	6.5%
環境	校舎	10	6.5	6.5%
環境	椅子	9	5.9	5.9%
勉強	授業	9	5.9	5.9%
いじめ	いじめ	8	5.2	5.2%
雰囲気	古い	8	5.2	5.2%
教師	校長	8	5.2	5.2%
雰囲気	大きい	8	5.2	5.2%
雰囲気	嫌い	7	4.6	4.6%
雰囲気	広い	7	4.6	4.6%
勉強	算数	7	4.6	4.6%
種類	勝山	7	4.6	4.6%
種類	附属	7	4.6	4.6%
その他	無反応	7	4.6	4.6%
勉強	国語	6	3.9	3.9%
雰囲気	おもしろい	5	3.3	3.3%
勉強	教科書	5	3.3	3.3%
環境	時計	5	3.3	3.3%
勉強	社会	5	3.3	3.3%
勉強	宿題	5	3.3	3.3%
生徒	人	5	3.3	3.3%
行事・特活	掃除	5	3.3	3.3%

勉強	理科	5	3.3%	環境	筆記用具	3	2.0%
環境	クラス	4	2.6%	環境	本	3	2.0%
課外	クラブ	4	2.6%	環境	理科室	3	2.0%
環境	チャイム	4	2.6%	生徒	1組	2	1.3%
環境	ノート	4	2.6%	生徒	2組	2	1.3%
雰囲気	めんどうく:	4	2.6%	生徒	3組	2	1.3%
教師	教頭	4	2.6%	生徒	4組	2	1.3%
環境	黒板	4	2.6%	環境	プール	2	1.3%
雰囲気	新しい	4	2.6%	環境	ランドセル	2	1.3%
環境	体育館	4	2.6%	雰囲気	遠い	2	1.3%
休み・遊び	昼休み	4	2.6%	勉強	家庭科	2	1.3%
環境	木造	4	2.6%	環境	花	2	1.3%
生徒	1年	3	2.0%	環境	花壇	2	1.3%
生徒	2年	3	2.0%	その他	怪談	2	1.3%
生徒	3年	3	2.0%	勉強	学ぶ	2	1.3%
生徒	4年	3	2.0%	行事・活活	学活	2	1.3%
生徒	5年	3	2.0%	雰囲気	狭い	2	1.3%
生徒	6年	3	2.0%	環境	校庭	2	1.3%
雰囲気	きつい	3	2.0%	環境	校門	2	1.3%
雰囲気	でかい	3	2.0%	生徒	子ども	2	1.3%
勉強	運動	3	2.0%	勉強	習字	2	1.3%
種類	清石	3	2.0%	勉強	水泳	2	1.3%
休み・遊び	休み時間	3	2.0%	種類	西浦上	2	1.3%
勉強	教科	3	2.0%	勉強	道徳	2	1.3%
種類	小学校	3	2.0%	環境	部屋	2	1.3%
勉強	図工	3	2.0%	課外	放課後	2	1.3%
環境	図書室	3	2.0%	環境	本	2	1.3%
環境	窓	3	2.0%	環境	遊び道具	2	1.3%
勉強	体育	3	2.0%	環境	歴史	2	1.3%
種類	中学校	3	2.0%		(1語以下省略)		
休み・遊び	中休み	3	2.0%	total		753	
その他	通う	3	2.0%				

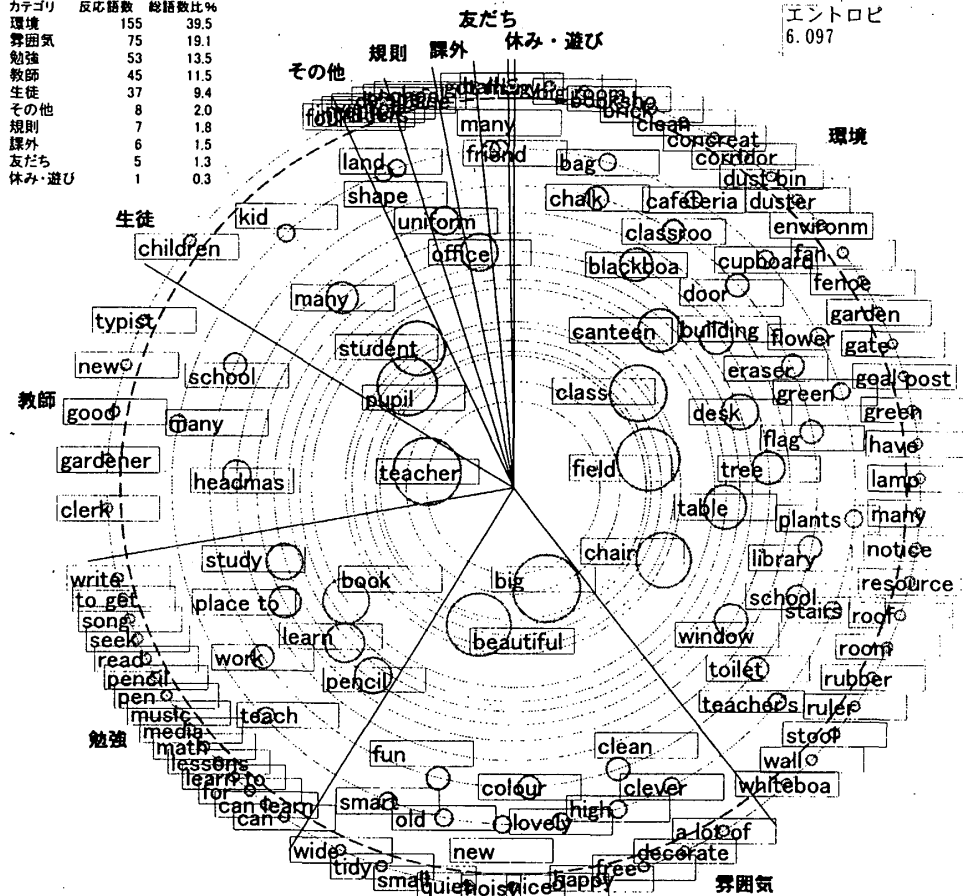
図7 〈学校〉長崎の小学生の連想マップと反応語

連想マップ(Association Map)
マレーシア小学校、ペナン、school
Stimulate Word: school, 1999年7月

Module Version 3.01, Programmed by T. Fujiki 1999.11

反応者数: 79 名, 反応語種数: 126 種類, 反応語総数: 392 語

カテゴリ	反応語数	総語数比%
環境	155	39.5
雰囲気	75	19.1
勉強	53	13.5
教師	45	11.5
生徒	37	9.4
その他	8	2.0
規則	7	1.8
課外	6	1.5
友だち	5	1.3
休み・遊び	1	0.3



Category	Response	語数	人数比百分率
教師	teacher	31	39.2%
雰囲気	big	25	31.6%
雰囲気	beautiful	19	24.1%
環境	field	18	22.8%
生徒	pupil	16	20.3%
環境	class	14	17.7%
環境	chair	13	16.5%
生徒	student	13	16.5%
勉強	book	9	11.4%
環境	canteen	8	10.1%
環境	table	8	10.1%
勉強	learn	7	8.9%
課外	office	6	7.6%
環境	desk	6	7.6%
勉強	pencil	6	7.6%
勉強	study	6	7.6%
環境	blackboard	5	6.3%
環境	building	5	6.3%
環境	tree	5	6.3%
環境	window	5	6.3%

生徒	many stud	5	6.3%
勉強	place to st	5	6.3%
規則	uniform	4	5.1%
教師	headmaste	4	5.1%
環境	chalk	3	3.8%
環境	classroom	3	3.8%
環境	door	3	3.8%
環境	eraser	3	3.8%
環境	flag	3	3.8%
環境	library	3	3.8%
環境	school bag	3	3.8%
環境	toilet	3	3.8%
教師	school sta	3	3.8%
雰囲気	clean	3	3.8%
雰囲気	colour	3	3.8%
雰囲気	fun	3	3.8%
勉強	work	3	3.8%
勉強	bag	2	2.5%
環境	cafeteria	2	2.5%
環境	cupboard	2	2.5%

環境	flower	2	2.5%
環境	green plan	2	2.5%
環境	plants	2	2.5%
環境	stairs	2	2.5%
環境	teacher's	2	2.5%
教師	many teac	2	2.5%
生徒	kid	2	2.5%
その他	land	2	2.5%
その他	shape	2	2.5%
友だち	friend	2	2.5%
友だち	many frien	2	2.5%
雰囲気	clever	2	2.5%
雰囲気	high	2	2.5%
雰囲気	lovely	2	2.5%
雰囲気	new	2	2.5%
雰囲気	old	2	2.5%
雰囲気	smart	2	2.5%
勉強	teach	2	2.5%
(1語以下省略)			
total		392	

図 8 〈school 学校〉ペナンの小学生の連想マップと反応語

ペナンの具体的なものを挙げる反応語の様相、また学校そのものへの注視は《環境》(ペナンで反応語数比 39.5%, 長崎で 20.8%) に、相対的な反応語数の多さに¹⁰⁾現れる。ペナンでは「field 運動場」「class」(17.7%)「chair」(16.5%) が上位にくる、長崎では「教室」(12.4%)「机」(7.2%)「運動場」(6.5%) である、その意味では想起される割合は変わっても基本となる語はさほど変わらない。ペナンの小学校に「canteen 売店」があるが、長崎の小学校にはない。

長崎における《友だち》《休み・遊び》の多さは、学校にいる時間の差であろう。ペナンの調査した小学校が 2 部制で、学校行事、特別活動の少なさから説明できる。

いじめはペナンの小学校では現れないが、長崎では人数比 5.2% 出現した。いじめが学校と結びついている点は、日本の学校の特徴である。

V おわりに

学校の雰囲気は、連想調査によって見ることのできる重要な要素である。学校は学生や生徒からそれほど好まれていない。いじめの反応語がないオスナブリュックやペナンでも肯定的雰囲気が少ない傾向にある。学校の《雰囲気》カテゴリが良くなった 2002 年長崎の調査を基準にすると、大学生を対象にしたどの調査も《雰囲気》に有意差がある。学校の雰囲気の良さには日本の場合、友だちの要因が重いと考えていだろう。友だちを多く想起した 2002 年長崎、長崎の小学校を基準にすると、他の大学生に対する調査、ペナンの小学校での調査と有意差があるが、制度上小学校で午後を学校外で過ごすドイツ、ペナンは、むしろ学校以外の友人関係をもつ良さがある。

連想調査からは、1996 年の長崎で学校イメージのもつ雰囲気は良くなかったが、2002 年には良くなっており、学校が落ち着いていることを示すと解釈できる。

休みや遊び、課外活動は、国による学校制度の差が反応語に現れるが、学校に関する連想調査から現れたのは、いじめの刺激語について論じた際と比べると、学校の普遍性の面であった。意識に現れた近代学校の共通の姿は、学校は先生のいるところで、生徒が勉強する（または勉強する手段がある）、そして友だちのいるところである。

註

- 1) 1997 年 5 月をピークに後退し始めた景気の影響により、国富（正味資産）が 1998 年から 3 年続けて現象し、休職理由別完全失業者数をみると非自発的な離職者数が 1998 年から急速に増加している（情報・知識 imidas2003, 集英社, 428-429 頁, 478 頁）。
- 2) 1997 年から 98 年にかけて中学生新聞が「学校って何だろう」という企画を組んだのも、学校再考の気運を表している：荻谷剛彦, 学校って何だろう, 講談社, 1998。
- 3) 上藺恒太郎, いじめに関するドイツ, マレーシア, 日本の意識比較研究——連想調査によるオスナブリュック, ペナン, 長崎の大学生の調査——, 長崎大学教育学部紀要教育科学第 64 号 2003 年 3 月
- 4) 上藺, 前掲論文。また日本国語大辞典第二版編集委員会, 小学館国語辞典編集部, 日本国語大辞典第一巻, 小学館, 2000 年 12 月第二版第一巻第一刷では次のように記述されている：「昭和 60 年（1985）ごろからは、特に学校において、弱い立場の生徒を集団で肉体的または精神

的に苦しめる、陰湿化したいいわゆる校内暴力を指すことが多い」。

- 5) オスナブリュックの調査は1998年10月大学生対象、ペナンでの調査は1999年7月大学生対象並びに小学生対象、また小学生は長崎での1996年7月の調査（いずれも5年生相当）、長崎ではさらに1996年6月ならびに2002年10月の大学生対象の調査である。長崎の小学生に対する調査は3つの小学校における調査であるが、他は1つの教育機関、複数学級、複数学部の調査である。ペナンの小学校での調査は、英語で可能な場合は英語で、そうでない場合はマレー語でおこない、Rozhan M. Idrus 教授に英訳していただいた。ドイツでの調査は、筆者自身がおこなった。

いずれも筆者による調査であるが、オスナブリュックでは Claudia Solzbacher 教授に、ペナンでは Rozhan M. Idrus 教授にお世話になった。感謝申し上げる。参考にしたブルネイでの調査は Hj Abd Rahman Abd Hamid Bin 氏による。

- 6) 調査における刺激語を〈 〉で示し、被験者が連想した言葉すなわち反応語を「 」で、反応語を分類したカテゴリを《 》で表した。また以下に示す図において、左側に連想マップを示し、図の右または下に2人以上が連想した反応語、図3以降は反応語を分類したカテゴリ、反応者実数、人数比百分率を並べた。図3以降左上に示す各反応語の割合は、反応語数に対する割合である。連想マップの左上は、調査対象、連想の刺激語、調査年月を示し、連想マップの中央上に、調査対象者数を反応者数として、さらに反応語種数、反応語総数を示した。
- 7) 上 菌恒太郎、糸山景大、連想調査による情意測定を試み——子どもたちが感じた学校——、長崎大学教育学部教育科学研究報告第54号、1998年3月、29-30頁参照。
- 8) 上 菌恒太郎、前掲論文、2003年3月、pp.22-25。
- 9) 13歳から18歳を調査した総務庁青少年対策本部、「青少年の友人関係に関する国際比較調査」1991が少し古い調査であるが、具体的な数値を出している：日本では同じクラスの人、以前同じ学校だった人が友人の95.8%を占め（西ドイツで77.5%）、学校以外のスポーツクラブや趣味のサークルで知り合った人が日本で19.6%、これに比べて西ドイツで48.5%およそ半分に及ぶ。
- 10) 1人あたりの反応語数は長崎で平均4.92語、ペナンで4.96語であるのに対して《環境》カテゴリに分類される語は長崎で平均1.31語、ペナンで1.59語になる。